

## 故宮博物院における「フォルモサ展」：台湾における歴史認識の変化と文化遺産

著者	野林 厚志
雑誌名	民博通信
巻	108
ページ	12-13
発行年	2005-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4906">http://hdl.handle.net/10502/4906</a>

台湾を代表する博物館である故宮博物院。



# 故宮博物院における「フォルモサ展」

## ——台湾における歴史認識の変化と文化遺産

台湾の博物館といったときにまず思い浮かべるのは「故宮」だという人は多いのではなかろうか。歴代中国王朝が収集してきた中国の宝物がもつ、台湾に観光客を引き寄せる吸引力は衰えることを知らない。一方で、台湾の人びとのあいだでは故宮博物院は台湾を象徴する存在としては必ずしも認識されていない。

文化遺産とは単に「遺されたモノ」ではなく、「遺したいモノ」、「継承したいモノ」という定義が与えられている（西山2004：1-2）。また、「モノ」と同時に、「モノ」を取り巻く人びとの営みや「モノ」を継承していくシス

テムを含めた包括的な概念として文化遺産はとらえられてきた（河野1995）。ここで留意すべきは、文化遺産の管理やヘリテージツーリズムに関する具体的な研究において対象となってきたのが、文化遺産が自らのものであるという前提をもった集団であることが多いということである。これに対し、特に90年代以降の台湾では、政治的な民主化が進むなかで、中国史とは異なる台湾の歴史をどのように示していくかということ意識する人びとの姿が見え隠れしている。変わりゆく歴史認識によって、その存在に矛盾を生み出しかねない文化遺産を台湾の人びとはどのようにとらえていこうとしているのだろうか。

### 台湾の歴史と台湾にもちこまれた歴史

もともと、台湾は大陸中国の歴代王朝から辺境の地という扱いを受けてきた。17世紀前半のオランダによる部分的な統治や鄭成功による一時的な支配を経て、17世紀後半から、日清戦争後の日本による統治までの間、台湾

は清朝の支配下におかれ、福建省南部や広東省からの移民が台湾に入植していった。大陸からの漢族系住民の定着化が進行するにつれ、彼らが入植した平野部にすでに居住していた先住民族集団は、漢民族との接触によって、彼らの言語や慣習を取り入れて「漢化」し、次第に固有の言語や文化を失っていった。これに対して、山地部に住んでいた先住民族は、漢民族への同化を嫌い、自らの文化伝統を保持して、外来者と対立を深めていった。

1895年、日清戦争の結果、台湾は日本に割譲され、50年間におよぶ日本統治が始まった。日本統治時代には、日本からの移民が増加した。これらの人びとは「内地人」とよばれ、それまで台湾島の大多数を占めていた漢族系住民は「本島人」とよばれるようになった。第二次大戦が終結し、「内地人」の多くが日本に引き揚げた後、入れ替わるようにして台湾に入ってきたのが、外省人とよばれる人びとである。国民党政府から派遣された軍人および政府関係者、さらに、1949年前後に蒋介石

### 野林厚志 文・写真

のばやしあつし

文化資源研究センター助教授。

民族考古学専攻。

論文に「鳥居龍蔵の台湾・西南中国調査」（『史窓』34、徳島地方史研究会、2004年）、「台湾パイワンのイノシシ猟」（松井健編『核としての周辺』講座・生態人類学6、京都大学学術出版会、2004年）などがある。

が共産党との内戦に敗れて台湾に退去した際に、国民党軍とともに中国大陆出身者が台湾に移住してきた。

政治的な支配層となった外省人は、台湾を中国として扱う政策を強力に推し進めた。外省人に対して本省人とよばれた従来の漢族系住人の母語である福佬語や客家語を公的な場面から排除し、北京官話にもとづく普通語を公用語として定めた。史観についても、中国史が台湾の正史とされた。中華思想にもとづく中国史は学校の教科書をとおして、またラジオやテレビといったメディアや博物館といった社会的施設を通じて台湾の人びとにすり込まれていった。

### 教科書『認識台湾』と故宮博物院「フォルモサ」展

北京原人や殷王朝の記述からはじまる台湾の歴史教科書に大きな変化が訪れたのが、1998年から正式に中学校1年生の教科書として導入された『認識台湾（歴史編）』である。これまでの中国史と大きく違うのは、台湾島における先史時代の解説はあるものの、それ以降17世紀のオランダ、スペインによる台湾支配までの間についてはほとんど触れられていないという点である。また、教科書の最後の部分で、兩岸関係の正常化という観点から、大陸中国と台湾の両者の存在を肯定的にとらえている点でも、これまでの外交関係の認識とは大きく違うといえる。

学校教育における新たな台湾史観が定着しつつあるなか、台湾史を社会の中で強烈に印象づけたのが、2003年に故宮博物院で開催された『フォルモサ——十七世紀の台湾、オランダ、東アジア』（原題「福爾摩沙——十七世紀的台湾・荷蘭與東亞」）展（以後フォルモサ展）であった。約2年の準備期間をかけた展示会では350点あまりの国内外の資料が展示された。オランダから貸し出された資料が多く、国宝クラスの「鄭成功とオランダの投降協議書」をはじめとする文書資料、武器や陶磁器といった交易品に加え、特に件数として目立ったのが台湾の存在を示した地図の類であった。すなわち、海外において台湾がどのように認識されていたかを示す資料の存在が、この展示会では重要な意味をもっていたのである。

展示会の図録によせた前言の中で、故宮博物院の院長（当時）はこの展示会の主題を台湾の誕生と意味づけたうえで、故宮博物院は



左・新たな教科書である「認識台湾」の試用版表紙。

右・フォルモサ展の展示カタログ表紙。

中国の宝物を収蔵管理する場所としてだけでなく、台湾の歴史と向き合い、対話する場所であればならないとしている。（杜2003：1-4）。これまでの台湾史は大陸中国からの視点で説明されてきた。こうした立場からは台湾は辺境とみなされてしまう。そこで、この展示会では台湾が中心となる舞台を探し、それを17世紀の東アジアの国際関係に見いだしたのであった。しかしながら、厳密に考えれば、台湾はあくまで舞台でしかなく、実際に主役を担ったのはオランダであり、中国であったと言わざるをえない。当時の地図の上でたとえ台湾が中心に描かれたとしても、それは台湾が誕生したことを意味しているのではないであろう。

### 台湾史と共存する文化遺産

台湾が主体性を強調すればするほど、台湾史に無関係な資料の妥当性は疑われることになる。当然のことながら、故宮博物院の資料は台湾のものではなく、大陸中国に返すべきだという議論も生まれてくるであろう。実際、台湾独立を主張する人びとのなかに、独立と引換えに故宮博物院の資料を中国に返還すべきだという意見もあると聞く。しかしながら、重要な観光資源でもある故宮博物院の資料を中国に返還することは台湾にとっては明らかに得策ではない。そこで、台湾の歴史を再認識する場としての位置づけを与えることによって、故宮博物院の性格そのものを変換していこうという狙いがこのフォルモサ展にあったように思われる。資金的な理由や海外との交渉という条件もあったであろうが、フォルモサ展が、日本総督府が創設した総督府博物館を前身とする国立台湾博物館や、国民

党政権が台湾に移ってから創建された国立歴史博物館ではなく、国立故宮博物院で行われたということは、大陸中国から持ち込まれたものがこれからの台湾社会の中でも矛盾をもつものではないということを保証するものだったと考えられなくはない。

フォルモサ展は故宮博物院で開催された後、台南でも巡回展として開催された。台南はオランダが統治府を設置した場所であり、じつは2007年に国立の台湾歴史博物館の開館が予定されている。国立故宮博物院や国立歴史博物館がすでに存在するにもかかわらず、新たな歴史博物館で、しかも台湾史の博物館が創設されるというのも台湾の現状をよく表している動きといえるだろう。一見矛盾しあう歴史を並立させていくしたたかさも台湾がこれまでの歴史経験のなかで培ってきた「遺したものの」のひとつではなかろうか。

### 注

1) フォルモサ展については、故宮博物院のHPにその概要が紹介されている。

<http://www.npm.gov.tw/exhibition/formosa/chinese/index.htm>

### 参考文献

- 国立編訳館 2000『台湾を知る』蔡易達・永山英樹訳、東京：雄山閣。
- 河野靖 1995『文化遺産と保存と国際協力』東京：風響社。
- 杜正勝 2003「序」『福爾摩沙——十七世紀的台湾・荷蘭與東亞』1頁、台北：国立故宮博物院。
- 西山徳明 2004「序文」西山徳明編『文化遺産マネジメントとツーリズムの現状と課題』（国立民族学博物館調査報告51）1-8頁。